

ハイデガーは『存在と時間』の気づかい（ケア）論において、道具への気づかいである①配慮（Besorgen）、②ときに依存や支配につながり、「世人」とも関係する尽力的な顧慮的な気づかい（einspringende Fürsorge）、③「本来性」と関係するとされる垂範的な顧慮的な気づかい（vorausspringende Fürsorge）の3つを区別している。この議論をうけて、ボスの現存在分析や、ベナーとルーベルの影響を受けたケアの哲学においては、顧慮的な気づかいのうち2つについては、②の顧慮的な気づかいが臨床実践において避けるべき、ないし乗り越えられるべきものであるとされ、③の顧慮的な気づかいが重視されてきた（本発表では扱わないが、想像界よりも象徴界を重視する1950年代のラカンの議論もまた、大枠では同じ区別に基づいていると言えるだろう）。

しかし他方では、『現象学の根本諸問題』においてハイデガーは、「世人」の自己理解は真正でないわけではなく、「実存しつつ情熱的に諸物に没頭することの内部で、このように自らをもつことは、立派に真正であることができる」とも述べている。だとすれば、これまで重視されてきた③の顧慮的な気づかいだけでなく、②の顧慮的な気づかいが臨床実践においてどのように現れ、どのような役割を果たしているのかが検討されなければならないだろう。

発表者のみるところでは、ビンスワンガーやブランケンブルクの議論（特にその治療論）には、ハイデガーの言葉遣いで言えば、むしろ②の顧慮的な気づかいに重きを置いていると考えられる箇所がある。これらの議論は、クリッチリーによる「根源的な非本来性」という概念を参照することによって、これまで本来性とは関係づけてこられなかったものにも根源性を与えなおすような仕方で、ハイデガーの気づかい論と関連づけて読解することができるかもしれない。そのように読解するならば、ハイデガーの気づかい論はさらに、自閉症スペクトラムをはじめとするマイノリティにとっての「類似的他者」の役割、自助グループや当事者研究における「頹落」と「存在免責」の効果を評価する際に有用であるだけでなく、人間どうしの「相互依存」的なあり方を重視するケアの倫理学とも接続可能なものとなるように思われる。